

今週の為替相場見通し(2018年6月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.20 ~ 110.27	109.56	108.00 ~ 111.50
ユーロ	(ドル)		1.1653 ~ 1.1840	1.1770	1.1600 ~ 1.1850
(1ユーロ=)	(円)		127.71 ~ 130.26	128.94	127.00 ~ 130.00
英ポンド	(ドル)		1.3295 ~ 1.3472	1.3408	1.3200 ~ 1.3550
(1英ポンド=)	(円)	*	145.85 ~ 148.12	146.86	144.00 ~ 150.00
豪ドル	(ドル)		0.7558 ~ 0.7677	0.7599	0.7500 ~ 0.7700
(1豪ドル=)	(円)	*	82.59 ~ 84.54	83.26	82.50 ~ 85.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 108.00 ~ 111.50 円

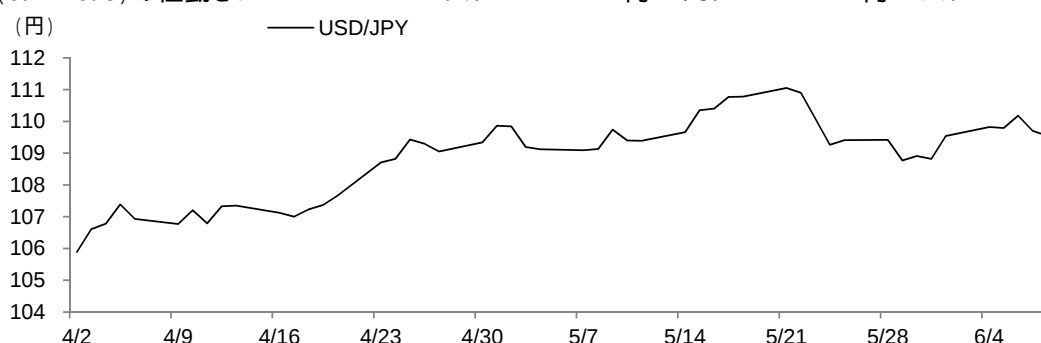
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場はもみ合い推移となった。週初4日に109円台半ばでオープン。週末に開催された米中通商協議で具体的な進展がなかったことやトランプ米政権が欧州連合(EU)・カナダ・メキシコからの鉄鋼・アルミ輸入に対する追加関税を1日から実施したことを受けて貿易摩擦への懸念が強まり109円台前半まで下落。しかし、米10年国債利回りが上昇すると109円台後半まで反発した。5日は一時110円を上回る場面も見られたが、貿易摩擦懸念等を背景に109円台半ばまで下落。その後は米5月ISM非製造業景気指数が良好な結果となったことから109円台後半まで買い戻された。6日はユーロ/ドルの急騰を受けてドル売り優勢となる局面もあったが、米株や米金利上昇を背景に週高値となる110.27円まで買い戻された。7日は米金利が急低下したことから一時109円台半ばまで値を下げたが、米金利が引けにかけて上昇すると109円台後半を回復。8日は週末のG7首脳会談への警戒感からリスク回避の動きが強まると一時週安値となる109.20円まで下落。その後は下げ止まったものの、方向感に乏しい推移となり109円台半ばで越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想する。12日~13日にかけてFOMCの開催が予定されている。今会合では利上げが確実視されており、注目はメンバーの政策金利見通し(ドットチャート)の内容。3月時点では2018年中の利上げ回数の中央値は3回となっていたが、今回は4回に引き上げられる可能性もありそう。こちらについてもマーケットにおいて相応に織り込みは進んでいる状況ではあるものの、今週はECB理事会、日銀金融政策決定会合も予定されており、中銀イベントが相次ぐ一週間。金融政策に注目が集まりやすく、日米の金融政策格差が改めて意識されることでドル/円の上昇につながると考えている。ただし、トランプ米政権の動向には注意が必要。12日には米朝首脳会談が開催される。一旦キャンセルとなった会談が開催となったことで、過度な警戒感こそ後退しているものの、結果次第ではリスクセンチメントを大きく悪化させることも想定される。また、週末に開催されたG7首脳会談では通商政策を巡る対立が解消されない中でも一旦は首脳宣言が採択されたが、その後トランプ米大統領は承認を拒否している。メインシナリオとしては底堅い推移を予想するも、リスクセンチメントの悪化を背景に円買い圧力が強まる局面もありそう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/4~6/8)の値動き: 安値 109.20 円 高値 110.27 円 終値 109.56 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 坂本 真史

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1850 127.00 ~ 130.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は上昇する展開となった。対ドルでは週初4日、1.16台半ばでオープン。前週から強まったイタリア政局不安への警戒感が後退し、欧州株が堅調推移する中、1.17台を回復。翌5日、コンテ・イタリア新首相が所信表明演説で「今後急進的な変革を行なっていく」と発言したことでイタリア政局不安への警戒感が再燃し、週安値1.1653まで下落。その後、関係筋の話として「来月14日のECB理事会で資産買入プログラム終了時期を公表する可能性がある」と報じられ、1.17台を回復。週央6日、プラートECB理事から「インフレがECBの目標に収束するとの兆しが強まっている」、バイトマン独連銀総裁から「年末までに資産買入プログラムを終了させるのが妥当」とのコメントに1.17台後半まで上昇。翌7日、ECB高官の発言を受けたECBによる量的緩和策の早期縮小に対する期待の高まりから週高値1.1840まで上昇。週末8日、発表された独4月鉱工業生産が前月比▲1.0%と予想(同+0.3%)を大きく下回ったことをきっかけに、ポジション調整と見られる売りフローが入り1.17台前半まで下落。結局1.17台半ばで越週した。対円では週初4日、127円台後半でオープンし、週安値127.71円をつける。その後127円台後半から128円台半ばで推移していたものの、6日のECB高官発言をきっかけにユーロ買いが強まると129円台半ばまで上昇。7日には週高値130.26円まで上値を伸ばしたが、週末はポジション調整もあって129円付近で越週した。

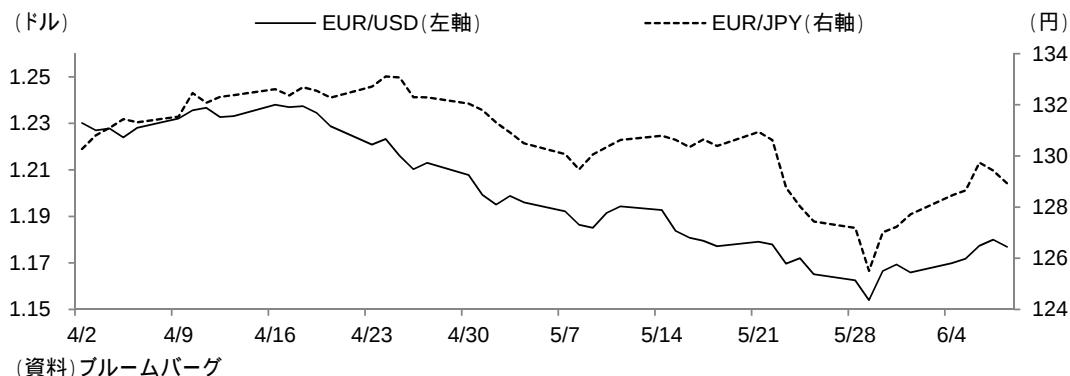
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想。先週はイタリア政局不安の後退とECB高官発言をきっかけとしたECBの早期金融緩和縮小観測からユーロが買い戻された。しかし、コンテ・イタリア新首相は歳出拡大に意欲を示している他、ユーロ懐疑派のサボナ氏は経済相起用こそ見送られたものの欧州担当相として閣僚入りしている。今後、新政権下で歳出拡大が進むと見込まれる中、EUとの関係については楽観視はできないように感じる。一方、相次ぐECB高官の金融緩和縮小を想像させる発言から今週14日(木)に開催されるECB政策理事会、ドラギECB総裁記者会見の内容に関心が集まる。高官の発言を踏まえればECBの金融緩和終了という出口は遠くないところまで来ている印象だが、過度な期待先行でユーロ高を招くことはECBとしても避けたいと考える。そのため、ドラギECB総裁は具体的な終了時期について、今週会合で明確にせずユーロの上値は限定的になると考える。他方、米国に目を転じれば、12~13日はFOMCが開催される。0.25%の利上げが確実視されている状況下、注目はドットチャートで年内残りの利上げ回数がどのように変化するかである。労働市場が良好で、物価も上昇してきているとみられ、利上げに対してより積極的な姿勢を示すことがあっても不思議ではない。その場合は米金利が上昇してドル買い相場となり、ユーロは弱含む展開になりそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/4~6/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1653 高値 1.1840 終値 1.1770

(対円) 安値 127.71 高値 130.26 終値 128.94



3. 英ポンド

欧州資金部 角 達郎

(1) 今週の予想レンジ: 1.3200 ~ 1.3550 144.00 ~ 150.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は堅調推移。週初4日は対ドルが1.33半ば、対円では146円近傍でオープン。2日に発表された英5月サービス業PMIは54.0と予想を上回った。春先の天候悪化によって悪化していたセンチメントの回復が示された。5日にかけて対ドルでは1.34、対円では148円まで上昇。7日には英国のEU離脱案の公表を前にデービス離脱担当大臣が辞任する可能性との報道がなされる等、ヘッドラインに振られる動きとなり、対ドルでは1.34台後半から、1.33台後半まで上下したのち、1.34台前半で落ち着きを取り戻した。公表されたEU離脱案では、EU離脱と同時に関税同盟から離脱するとしつつ、アイルランドの国境に関する議論については、国境管理を厳格に行うことを避けるため、2020年末までに方策が決まらなければ、2021年まで北アイルランドだけでなく、英国全体で関税同盟に残るとした。8日にはEUのバルニエ氏がアイルランドの国境に関し、英国全体で関税同盟に残ることに反対を示したことで一時1.33台半ばまで下落する局面が見られたが、週末のG7や来週のイベントを控え、ポジションを傾ける動きは限定的となり、ポンド/ドルは1.34台前半、ポンド/円は146円後半での越週となった。

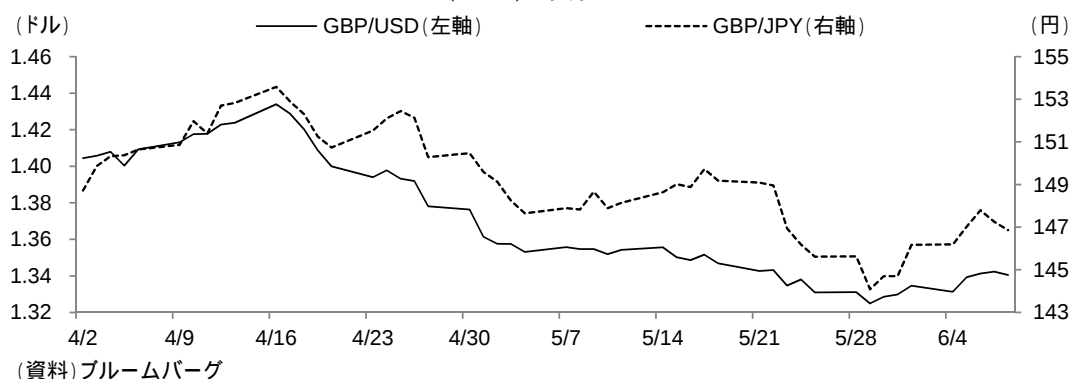
今週の英ポンド相場はイベントが多く、上下に振れる展開を予想。12日(火)米朝首脳会談はここまでに至る経緯も不安定だったこともあり、会談前後のヘッドラインリスクによるクロス円主導の動きに関しては引き続き注意が必要。13日(水)のFOMCでは利上げは既に織り込まれているため、経済見通しと金利見通しが引き上げとフォワードガイダンスの修正に注目が集まる。先行きの金利見通しが引き上げられた場合、米金利上昇を背景にドル高を見込む。14日(木)のECBではQEの終了に関する議論に注目が集まる。詳細の発表については7月以降になる可能性もあるが、先週ブラット氏はインフレに対して強気の見方を示したこともあり、少なくとも議論は開始されるものと考えられる。経済指標は12日(火)には英4月雇用統計、13日(水)に英5月CPI、14日(木)に英5月小売売上高が発表されるが、5月は天候回復と王室の結婚式を背景に指標の改善が見込まれる。BREXIT関連では12日(火)に英国では英離脱修正法案に対し、議会投票が行われる。可決された場合、BREXITに関する議会の権限が強くなるため、よりソフトな離脱への期待が高まることが見込まれる。月末の欧州首脳会議が近づいてきていることもあり、英国EU双方の主張には引き続き注意が必要であろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/4~6/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3295 高値 1.3472 終値 1.3408

(対円) 安値 145.85 高値 148.12 終値 146.86



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部シドニー室 今村 加奈子

(1) 今週の予想レンジ: 0.7500 ~ 0.7700 82.50 ~ 85.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は往って来いの展開となった。4日、豪ドルは0.75後半で取引始まり、豪4月小売売上高の予想より高い結果を好感して0.76半ばまで大幅に上昇した。翌日の豪州準備銀行(RBA)理事会では、市場予想通りとなる政策金利1.50%の据え置きが発表され、その声明文で『低金利が豪経済を支援・インフレは当面低水準・米通商政策の方向性に懸念』などが示されたが、豪ドルへの影響は限定的だった。豪ドルは、豪1～3月期経常収支が予想(99億ドル赤字)よりやや高水準の105億ドル赤字には目立った動意を示さず0.7600を挟んでの狭いレンジ取引が続いた。6日、豪1～3月期GDPが市場予想(前年比+2.8%)に対し同+3.1%と良好な結果となったことを材料に豪ドル買いが強まり、週高値となる0.7677まで上昇した。しかし、7日は豪4月貿易収支が予想を若干下回ったことを受け、豪ドルは0.76前半へ軟化した。8日から開かれたG7首脳会談では世界の貿易摩擦の行方に市場の焦点が移る中、豪ドルは一時0.75半ばまで値を下げるなど軟調な値動きとなった。先週の豪ドル/円相場は週前半に上昇したが後半は急落する展開となった。4日、豪ドル/円は82円半ばでオープン。先週は数多くの豪経済指標が発表され、まず豪4月小売売上高の良好な結果を受け豪ドル/円は84円台まで上昇。引続き84円を挟んだ商いが続く中、予想より高い豪1月～3月期GDPを受けた豪ドル買いの動きから豪ドル/円は週高値となる84.54円まで上昇した。もっとも、G7首脳会談が開催される中、米国とEUなど主要国間の通商交渉の先行きが懸念され、豪ドル/円は週安値となる82.59円まで急落する展開となった。

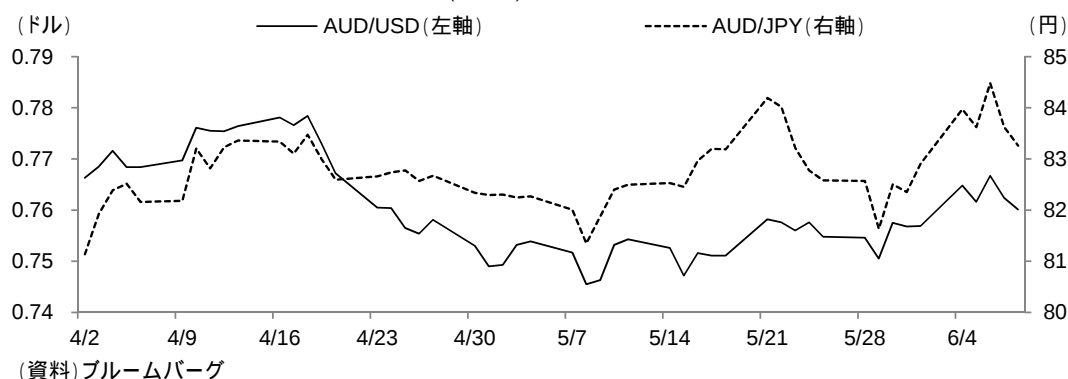
今週の豪ドルは引続き0.75～0.77間でのレンジ内推移を予想。豪ドル/円は83円台～84円台中心を予想。今週は数々の重要なイベントが予定されており、なかでも12日(火)シンガポールで米朝首脳会談、13日(水)米連邦公開市場委員会(FOMC)、14日(木)欧州中銀理事会(ECB)が特に注目される。FOMCで利上げは織込み済み、市場は利上げが加速するかどうかを見極めたいとしており、声明の内容次第でドル売り買いが顕著となろう。欧州中銀理事会では債券買入れ策を年内に終了させるか討議される話が浮上している。豪イベント及び指標では、13日(水)RBAロウ総裁の講演と、14日(木)に発表される豪5月雇用統計を注視したい。ただ、米政府の通商政策による各国との貿易摩擦が不透明な状況下、ドル買いが進むとも予想できず、豪ドルは0.76台を中心とした値動きを予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/4～6/8)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7558 高値 0.7677 終値 0.7599

(対円) 安値 82.59 高値 84.54 終値 83.26



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。